

## 雑誌『太陽』による風景写真の流通が風景の見かたにもたらした影響

Impact of landscape photographs distribution by the “Taiyo” magazine on the way Japanese see natural landscape

水谷 知生

Tomoo MIZUTANI

**Abstract:** It has been indicated that “The Japanese Landscape Theory” by Shiga shigetaka, which was published in 1894, was the key to change the way Japanese see natural landscape. The change occurred during this period seems to have resulted in the designation of National Parks in 1930s, and further investigation of the background is required.

This paper examines the transition of landscape photographs published in the “Taiyo” magazine, which is considered to be one of the factors influencing the way of seeing natural landscapes in Japan by distributing a large quantity of printed landscape photographs to the public. As the “Taiyo” magazine started to publish photographs selected by competitions, photographs of unidentified landscape increased in number after 1902, whereas “Meisyo” had been mainly featured before around 1900. This paper suggests that the distribution of photographs which had been influenced by landscape painting, hence emphasizing artistic beauty of landscapes, had changed the way general readers see natural landscapes.

**Keywords:** *landscape, photograph, “Taiyo” magazine, Shiga shigetaka*

キーワード：風景，写真，雑誌『太陽』，志賀重昂

### 1. はじめに

わが国で自然の風景に対する見かたが近代に変化したことについての指摘は、これまで複数なされてきている。勝原は1904（明治37）年以降定められた小学校国定教科書に描写された風景を追い、名所の景観美から田園景を主とした無名の景観美描写への推移を示す<sup>1)</sup>。また、利用対象としての山という評価が審美的な評価へと転換し、それは、1894（明治27）年、志賀重昂の『日本風景論』を契機としたとの見かたが示され<sup>2)</sup>、「信仰の地、伝説の地、歌枕の地などを評価する伝統的風景観から、自然景、人文景、生活景などを評価する近代的風景観に変わった」<sup>3)</sup>との指摘がされる。尾瀬、上高地、十和田湖、大雪山などの新しい山岳風景が見出されたことを例示としてあげ、その契機として、『日本風景論』をあげる<sup>4)</sup>。

山岳の見かたへの『日本風景論』の影響の指摘の一方、志賀自身の風景の見かたについて、勝原は、日本三景等の名所に大したこだわりを示していないが、基本的には、伝統的なものとさほど変わっていない<sup>5)</sup>とする。わが国での風景画の成立について検討した青木は、風景画家は、1880年頃から名所ではない風景を描き、風景画を成立させた経過を示し、『日本風景論』の影響を重視しない<sup>6)</sup>。

わが国の近代における風景の見かたの変化は、その後昭和初期に選定される国立公園にも結びつき、長く、制度として自然の風景の見かたを規定する仕組みの原点となった可能性が高い事象である。この事象の背景となった要因は、上述の志賀の『日本風景論』の影響の程度についての見解は様々あるが、それ以外の要因についての検討は多くない。

風景画に注目した論稿として、ニコルソンは、西欧での山への価値づけの変化について、風景画の登場と新しい科学観、宗教観が山々を「崇高なるもの」へと変えていったとし、風景画の成立を風景の見かたの変化の契機の一つとしている<sup>7)</sup>。上述の青木は、わが国での風景画の成立について、1895（明治28）年、明治美

術会の第7回展において、自然景を描いた作品が「風景」、「・・の景」と題し多く出品されたことなどから、明治20年代後半を日本近代風景画の成立時期とし、近代日本の自然観の形成の一つの過程とみる。そして明治美術会の中心であった浅井忠を近代日本で最も傑出した風景画家とみる<sup>8)</sup>。

絵葉書については、1904,05（明治37,38）年の日露戦争を契機に、慰問や記念に用いられて爆発的に流行が起り、名所絵葉書は明治30年代の終わりから40年代にかけて、写真とともに画家による風景絵葉書が流通していたとされる<sup>9)</sup>。柏木は、かつての名所図会や風景版画に描かれた風景はすでにエピソードを与えられた場所を中心としていたが、志賀は『日本風景論』で名所ではない風景に目を向けており、観光絵葉書はこの両者の視点を持っていたことを指摘している<sup>10)</sup>。

勝原は、1904（明治37）年の第1期国定教科書で無名の景観美がわずかに示され、1910（明治43）年の第2期の国定教科書で、その取扱が大きくなっていることを示し<sup>11)</sup>、この間に名所以外への視線が明確になってきたことを示している。

『日本風景論』が出版され、近代風景画が成立した明治20年代末は、出版物への写真製版が一般化し、雑誌メディアへ写真が本格登場した時期<sup>12)</sup>である。雑誌において写真が多用され、風景を写した写真が多く流通し始めた。この時期以降の雑誌の流通は、大量に様々な風景を視覚的に人々に示したことから、近代の自然の風景の見かたに変化をもたらす一因となった可能性があり、検討対象とする意義は高い。

### 2. 研究方法

明治20年代以降において、自然の風景の見かたの変化をもたらした要因として、この時期に継続的に大量に発行され、結果として膨大な風景写真を掲載し流通させた雑誌『太陽』がもたらした影響について、本稿では検討対象とする。雑誌『太陽』の1895（明治28）年の創刊から1928（昭和3）年の終刊までの間に掲

載された国内の風景を写した写真について、年別の掲載件数、時期ごとに取り上げられ場所の件数の分析を行うとともに、主に明治期に掲載された写真でとりあげられている場所の変化を検討することにより、この時期に伝統的な名所からそれ以外の場所へ目を向ける動きが認められるかを明らかにする。

### 3. 雑誌『太陽』と写真技術に関する既往知見

検討対象とする雑誌『太陽』は、1895（明治28）年に博文館により創刊され、創刊後から毎号10万部程度の発行<sup>13)</sup>があり、当時の雑誌としては随一の発行部数で、「名のある新聞各紙をはるかに凌駕するものであったことはまちがいない<sup>14)</sup>とされる巨大雑誌であった。また、わが国初の総合雑誌として、専門家、当代一流の者に紙面を提供することに徹し、「これだけの巨大雑誌であれば、また「国民のための公器」的な性格をもつがゆえに、その影響力は無視できない<sup>15)</sup>もの」とされる。博文館の薄利多売の方式で廉価で販売され、「中層以上の家庭に向けて「一家に一冊」の必需品というつくり<sup>16)</sup>で広く浸透した。

雑誌の初期の編集方針として写真を積極的に誌面に取り入れた点が特徴的で、表紙を重要記事や著名執筆者を強調するのではなく、口絵写真のリストで飾っていた点が特徴的であり<sup>17)</sup>、雑誌の中で写真は重要視されていた。日比は、創刊から3年間の口絵写真の内容を検討し、第1巻（1895（明治28）年）の場合、人物写真が多く、次いで風景写真が多かったこと、風景写真の中では、海外と国内のものがあるうち、国内のものは、机上旅行的なもの、旅行案内的なもの、報道的なもの三類型があることを示し、国内の風景を写した写真の内容については、第1巻第4号に掲載されている巖島の写真とその説明から、「紋切り型であった語られる風景と同じく、読者の前に示される風景もまた、フレーミングによって巧妙に取捨され脱臭化された名所絵そのものの風景である<sup>18)</sup>としている。

写真を印刷物に複製する技術についてみると、海外で網目版<sup>19)</sup>を用いる方法が開発され、陸地測量部の堀が雑誌からこの方法を学び、亜鉛版に焼き付けた網目版を創出し、1893（明治26）年に日本最初の写真凸版製版所である猶興舎を創設した<sup>20)</sup>。小川一眞はアメリカで網目銅板の写真製版法を学び、1893（明治26）年に製版、印刷機材を持ち帰り、翌年、網目版印刷業を開始している<sup>21)</sup>この猶興舎や小川一眞の網目版での写真印刷技術をいち早く出版物に活用したのが、教科書や実用書を幅広く大量に出版していた博文館であった。博文館は1894（明治27）年8月に創刊した雑誌『日清戦争実記』において、網目銅板印刷を用いた軍人の写真を多く掲載し、10万部を超える発行に成功し、1895（明治28）年1月創刊の雑誌『太陽』でも写真を多く掲載する。これら雑誌の写真の多くは小川写真製版所で製版、印刷された<sup>22)</sup>。博文館は書籍でも、風景写真を1895（明治28）年から取り入れ、国内の旅行ガイドブックとして「もっとも知られる一つ<sup>23)</sup>とされる野崎左文による『東海東山畿内山陽漫遊案内』の3版増補に際し、29葉の風景写真を挿入している。この時期、博文館以外に出版点数が多かった春陽堂や『日本風景論』の出版元である政教社の出版物には写真の掲載は確認できず、網目印刷写真は博文館の独壇場であったと考えられ、雑誌『太陽』は印刷写真を大量に継続的に流通させた国内最初のメディアであったと言える。

写真撮影技術の一般への普及について、金子は、1880～90年代にゼラチン乾板法の導入により、営業写真師ではないアマチュア写真家が登場し、絵画を規範とする芸術写真の追及が開始される動きがあったことを示す<sup>24)</sup>。風景写真と風景画との関連について、打林は、当時、写真構図論としては、風景画家浅井忠による伝統的西洋絵画の構図を写真に適用させる論が写真雑誌に掲載され、その論にそって撮影された作品がみられることを示している

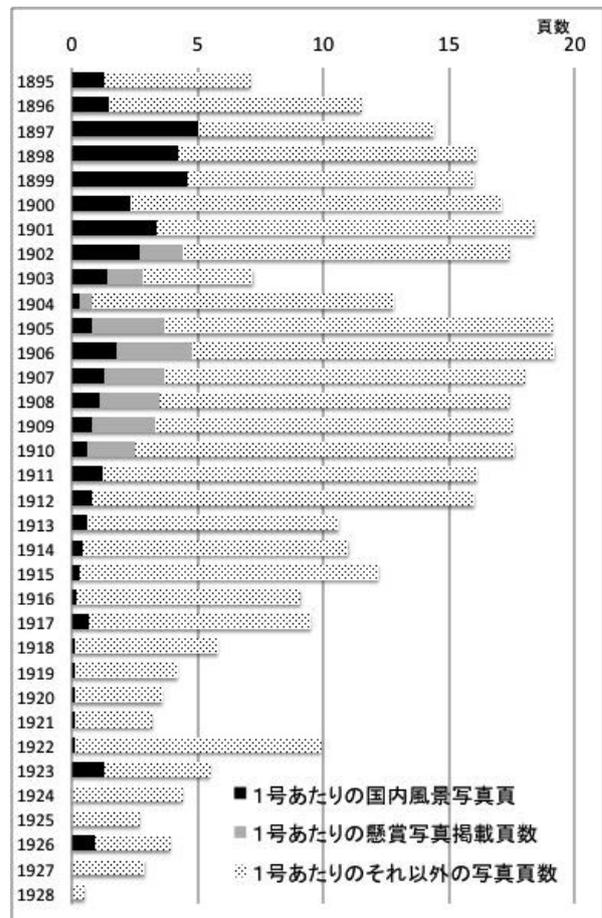


図1 雑誌『太陽』での口絵写真の掲載件数の推移

<sup>25)</sup>金子は日本での芸術写真は肖像や風俗でなく、風景表現を軸に展開したとし、その要因として、浅井の写真構図論では風景しか扱われていなかった点を指摘する<sup>26)</sup>。明治20年代以降、風景画の構図を参考にアマチュア写真家によって多くの風景写真が撮影されたことになる。

### 4. 雑誌『太陽』掲載の風景写真の掲載件数と内容の推移

#### (1) 風景写真の掲載頻度の推移

雑誌『太陽』の創刊時から1928（昭和3）年の終刊時までに掲載された写真のうち、国内の風景（人物、建造物の内部、行事、災害報道を対象とした写真を除き、屋外で撮影されたもの）を対象とした写真の頁数<sup>27)</sup>について、年ごとに整理したものが図-1である。年によって発行号数が違うため、1号あたりに掲載されている写真の頁数、その中で国内風景を写した写真の頁数、1902（明治35）年から開始された懸賞作品の入選作の掲載頁数を示した。1903（明治36）年に写真掲載頁数が一時的に減少しているが、1912（明治45）年までは1号あたり15頁以上が掲載され、その後、頁数は減少し、雑誌における写真の位置付けは相対的に低くなったと考えられる。1904（明治37）年は日露開戦の年であり、この年以降、軍事的な内容の写真が多くを占め、国内の一般的な風景の取り上げは少なくなり、戦争報道が一段落した後も、編集者が掲載する風景写真の頁数は減少したままである。しかし、この時期には、1902（明治35）年に懸賞写真募集が開始されている。懸賞募集は原則として毎月行われ、入選作品点数が毎号掲載される。風景写真に限った募集ではなかったが、募集の初期から応募、入選作のほとんどが風景写真であった。懸賞応募に占める風景写真の多さは、当時の芸術写真が風景を軸に展開したという前述の金子の論と合致する。1902（明治35）年12月の第8巻15号では、1903（明治36）年から懸賞写真募集を拡大する方針

表一 雑誌「太陽」掲載写真のうち風景写真に取り上げられた場所の推移（数字は掲載件数）

	1895~	1904	1909	1914	1919	1924	1928	備考
富士山	16	3	3	1	1	1	1	
嵐山	6	2	1	2		1	1	広重
厳島	3	3	1				1	広重
松島	5	6		1			1	広重
中禪寺湖	3	1		1			1	百景
保津川			2	2		1	1	百景
榛名山	3	2	1					広重
華嚴瀧	3	3	1					八景
阿蘇山	1	1	1					二十五勝
瀨八丁	3	1		1				二十五勝
那智瀧	2	2		1				二十五勝
箱根温泉	6	1		1				二十五勝
御嶽昇仙峽	4	1				1		二十五勝
三保のまつ原	1	1					1	広重
琵琶湖	3		1			1		二十五勝
富士白糸瀧	1		1			1		百景
十和田湖		1	3			1		八景
和歌浦	4	2						広重
天橋立	1	3						広重
耶馬溪	3	3						広重/百景
鹽原温泉	5	2						二十五勝
富士川	3	1						百景
舞子濱	4		1					広重

が述べられ、実際にこの年以降、入選作の掲載点数は多くなる。懸賞入選作品によって風景写真が代替され、編集者が掲載する風景写真の数は少なくなったと言える。懸賞入選作が掲載されていた時期は、風景写真頁と懸賞入選作掲載頁の合計が国内の風景写真の掲載頁数と考えてよい。

懸賞の終了後は、国内風景写真の掲載件数は減少する。1923（大正12）年と1926（大正15）年に掲載件数が多いが、第29巻8号での「日本山水大観」特集と第32巻8号での「自然美の日本」特集にまわって国内風景写真が掲載されているためである。このようなテーマ別の特集を組んで風景写真を集中的に掲載することはあるが、それ以外の号ではこの時期ほとんど風景写真の掲載は見られない。

### （2）掲載された場所とその推移

創刊時から終刊時までの雑誌『太陽』に掲載された国内の自然風景の写真（懸賞入選作を除く）の対象となっている場所について、概ね5年毎に7つの時期に分けてそれぞれの場所の掲載数を集計したものが表一である。検討対象とした場所の単位は、1927（昭和2）年に東京日日新聞、大阪毎日新聞の共催で行われた新日本八景の選定で八景、二十五勝、百景に選出された単位を便宜的に用いた<sup>28</sup>。また、新日本八景の選定では日本三景は対象となっていないため、広重の「六十余州名所図会」に取り上げられている名所も一つの単位として用いた。表一では、掲載時期による掲載場所の変化を明らかにするため、掲載件数の合計数が4回以上の場所、あるいは7期のうち3期以上で取り上げられた場所を抽出しまとめている。また、備考として、前述の新日本八景での選定結果（八景、二十五勝、百景）と広重の「六十余州名所図会」で取り上げられているかについて注記した。1904（明治37）年までは国内風景写真の取り上げ数が多い時期であるが、その後は、風景写真の取り上げが減少した時期であり、この間は5年の間に1回掲載されるかどうかという低い頻度である。富士山、嵐

山、厳島、松島、中禪寺湖、保津川が、多くの時期で取り上げられている一方、和歌浦、天橋立、耶馬溪、塩原（溪谷としての取り上げ）、富士川など、最初の10年間に多く掲載されたもののそれ以降の掲載がない場所も多くみられる。

### （3）掲載された風景写真の内容の変化

第4章(1)でふれたように、1902（明治35）年から懸賞写真の募集が始まり、入選作品が誌面へ掲載される。懸賞写真で入選した写真の題目を見てみると、例えば1902（明治35）年の第8巻第14号に掲載された第10回懸賞では、「雨中の瀨八丁」（1等）、「雲間の月」、「熊野川網打」、「秋の隅田川」、「和田村の雨」（以上2等）、「怒瀧」、「漁村夕暮」、「家鶏」、「奥山の霧」、「夕照」、「池の興」、「日の出の神戸港」、「黄昏の帰帆」、「波瀧」、「山路」、「山火事」、「朝風」、「野路の牛」、「夕陽」（以上3等）である。このうち雑誌に掲載された作品は「雨中の瀨八丁」、「熊野川の網打」、「怒瀧」の3点である。図-2に、1902（明治35）年の第1回懸賞写真から1905（明治38）年までの4年間に誌面に掲載された入選作311点について、題名で場所を特定しているもの、場所を特定していないもの、風景以外を対象としたものに分類して示した。風景写真以外の動物などの写真が1割、場所を特定した風景写真が2割、場所を特定していないものが7割である。懸賞応募写真以外の編集者が掲載する風景写真の題目は、ほぼすべて場所が特定されており、これに対し、懸賞応募される風景写真の大半は場所を特定したものではない点が対照的である。

題目に場所が特定されている写真について、集計期間内に2回以上掲載されている場所を見ると、富士山5回、嵐山（嵐峽、渡月橋を含む）5回、淀川（澱江を含む）5回、綾瀬4回、不忍池3回、保津川3回、魚住滝、浮見堂、鴨川、中禪寺湖、羽田が2回となる。富士山、嵐山の一部、魚住滝、中禪寺湖、浮見堂といった撮影対象が明確に写されているものと、淀川、綾瀬のように、水辺の写真ではあるが、淀川、綾瀬川と特定することは困難なものにと大きく分かれる。後者は、例えば広重の「名所江戸百景」で川辺と筏夫、遠くに見える橋といった構図を示した「綾瀬鐘ヶ淵」の絵のイメージによって、水辺の景色と綾瀬、鐘ヶ淵という場所とが結びついているため、題目名に場所を入れたものと推察され、伝統的な名所に関連させて風景を捉えようとした結果と言える。淀川の水辺のながめに「澱江」と題目をつけた見かたも同様である。名所を対象とした写真、伝統的な名所と関連させる見かたでとらえた写真はあるが、しかし数としては少数で、場所を特定しない写真が圧倒的に多い。名所という枠から離れた、アノニマスな風景の取り上げが多い点に、浅井忠らの近代風景画の影響を背景に、写真表現において芸術的な視点を追求する動きをみることができる。

一方で、富士山、嵐山、中禪寺湖、保津川は、表一の上位に位置する名所との共通性がある。芸術性を追求する中で、名所を対象とする写真がなくなったわけではない。表一の上位にある

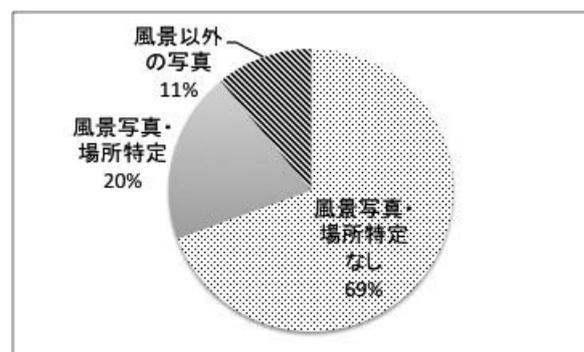


図-2 雑誌「太陽」(1902~1905年)に掲載された懸賞写真入選作品の内容内訳

松島、巖島は懸賞入選作では登場しないが、懸賞入選作は関東や近畿地方で撮影された写真が多いことから、アマチュア写真家の分布に左右された可能性がある。名所を見る視線がなくなったわけではなく、芸術写真の対象となる場所とそうでない場所に二分され、前者は継続的に風景写真の対象として雑誌に掲載され、人々の前に提示されることとなる。

## 5. 雑誌『太陽』の風景写真の受動性

雑誌に掲載する国内風景写真は、どの程度編集者が意図して選んでいたのだろうか。創刊の年に、国内の名所を選抜して構成したと思われる写真がみられる。1895(明治28)年9月の第1巻9号での「日本十二名勝」で、紀州瀨八丁／沼津江の浦／鈴川望嶽／室蘭石門／舞子海浜／紀州和歌浦／富士川急流／松島不老島／函根山中畑／大和月ヶ瀬／宇治川急流／伊豆網代漁村が十二勝としてあげられる。この写真に関連した本文記事はなく、集めた意図ははっきりしない。函根山中畑は畑宿であろうが、室蘭石門はどこをさすのか不明である。1ヶ月前の次号予告には、「函嶺諸勝、海外の諸名勝」を紹介とあるだけで、計画的に選定した12箇所ではない可能性が高い。一方、翌10月の1巻10号では「日本新三勝」と題し、相州由比ヶ浜／富士山／播州舞子浜の3箇所があげられ写真が掲載されている。こちらは、前号の予告に「日本新三勝は如何に選択の斬新なす姑(しばら)く読者の冥想を要す」とあり、「斬新な」3箇所を選ぶ意図があった。掲載された写真は1ヶ月前の予告とは裏腹に「斬新」とは言えず、第1巻10号本文の説明でも「茲に選べる新三勝というもの、固より以て無比の絶勝というに非ず、勝地三所を選べりというのみ」と記している。斬新な新名勝を紹介する意図はあったが、掲載できる写真原稿を十分に準備できなかったと考えられる。

雑誌に掲載する写真の準備については、写真撮影者から若干の検討が可能である。創刊から最初の3年間に掲載された国内の風景写真は176項目を数えるが、このうち撮影者名が明記されているものが121、そのうち56が博文館の支配人であり雑誌の発行人でもあった大橋乙羽の撮影、つまり自前であり、ほぼ同数の49がアマチュア写真家光村利藻の撮影である。1897(明治30)年の第3巻16号では、光村の撮影による「写真四季」と題する各地の四季の風景写真20点が掲載されている。その本文中の解説から、大橋は掲載する写真の選択を光村に委ねていたことが確認され、雑誌に掲載する写真の選択は、自社で撮影する以外は編集者が自由に選択できる状況にはなく、受動的な選択を行わざるを得なかったと考えられる。大橋が自ら撮影した写真は、旧来からの名所ばかりではなく、木曾須原宿の朝ぼらけ、鳥居峠の石仏と麓の山川(いずれも第2巻14号「濃信四十勝」、1896(明治29)年)など、名所ではない場所の風景も多く残している。大橋自身はアマチュア写真家として、名所以外の場所に目を向ける姿勢があったが、1901(明治34)年に没する。その後風景写真は懸賞入選作品で大半が占められることとなるが、編集者の意図とは別に投稿者と入選作選定者の志向によって掲載写真の内容が決まることとなり、より受動的な状態に推移していったといえる。

## 6. 雑誌『太陽』の風景写真がもたらしたもの

1895(明治28)年創刊の雑誌『太陽』によって、国内の風景を写した写真が、大量に人々の前に提示されはじめた。創刊からしばらくは名所の写真が多かったが、1902(明治35)年以降、懸賞応募写真の入選作が掲載され、名所ではない場所で、芸術的な視点でとらえた風景写真が多く提示された。一方、懸賞写真でも富士山、嵐山といった名所は風景として取り上げられ続けた。名所ではないアノニマスな風景が多く取り上げられる一方、名所の一部も芸術的な視点を伴って提示された。芸術写真の対象になる

かどうかで、名所をとらえる視線が分かれていった。明治30年代には近代風景画を規範とした芸術的な視点で雑誌に掲載される写真が決まり、人々の前に大量に提示されていくこととなったが、そこには雑誌の発行者の積極的な意図はなかった。

第1章でふれたが、勝原は、国定教科書の第1期(1904(明治37)年～)と第2期(1910(明治43)年～)の間に、名所の風景とともにアノニマスな風景が取り上げられるようになったことを示した。雑誌『太陽』による風景写真の流通が、明治30年代において自然の風景の見かたに影響を及ぼした可能性について指摘したい。

## 補注及び引用文献

- 1) 勝原文夫(1979): 農の美学: 論創社
- 2) 中川理(2008): 風景学: 共立出版
- 3) 西田正憲(2011): 自然の風景論: 清水弘文堂書房
- 4) 前掲3)
- 5) 前掲1)
- 6) 青木茂: 自然をうつす(1996): 岩波書店
- 7) M.H.ニコルソン・小黒和子訳(1989): 暗い山と栄光の山: 国書刊行会
- 8) 前掲6)
- 9) 多岐川周之(1980): 日本の名所と絵葉書: 『日本百景と土産品 江戸・明治4』, 平凡社所収
- 10) 柏木博(1987): 肖像のなかの権力: 平凡社
- 11) 前掲1)
- 12) 日比嘉高(1999): 創刊期『太陽』の挿画写真—風景写真とまなざしの政治学—: 筑波大学文化批評研究会編集・発行『植民地主義とアジアの表象』所収
- 13) 内務省: 大日本帝国内務省統計報告
- 14) 鈴木貞美(2001): 明治期『太陽』の沿革、および位置: 鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』, 思文閣出版所収
- 15) 前掲14)
- 16) 前掲14)
- 17) 前掲12)
- 18) 前掲12)
- 19) 写真、絵画などの濃淡を印刷するための凸版の一種で、網点の疎密面積によって濃淡を表現する。
- 20) (独)国立印刷局・お札と切手の博物館(2010): お札と写真術展
- 21) 吉野(岡塚)章子(2011): 小川一眞が手がけた網目版印刷について—東京朝日新聞を中心に: 芸術学研究16号, 91-99
- 22) 金子勤(2001): 初期『太陽』に見る明治写真術の展開: 鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』思文閣出版所収
- 23) 五井信(2000): 書を持って、旅に出よう—明治三〇年代の旅とガイドブック×紀行文—: 日本近代文学63, 31-44
- 24) 金子隆一(2004): 「絵」か「写真」か?—ピクトリアリズムというモダニティー—: 美術手帖56, 41-45
- 25) 打林俊(2012): 明治30年代の日本の写真表現に見られる近像型構図について: 芸術・メディア・コミュニケーション第9号, 55-67. なお、言及されている写真構図論は浅井忠(1889): 「写真の位置」(写真新報(3),(4),(7))
- 26) 前掲24)
- 27) 「松島勝景」などとして数葉の写真がセットで掲載されており、この項目数、概ね1項目が1ページ、あるいは折込となっているため、ページ数と考えてよい
- 28) 日本八景、二十五勝、百景の133箇所と富士山、日本三景以外の場所は、なるべく小範囲の場所を単位として整理した